



評価について

馬場明道*

assessment

現在ほど、日本のあらゆる場所で「評価」が社会的キーワードになっている時はないのではないだろうか。私自身この数年、数多くの評価に関わってきたし、勿論、評価の対象でもあった。面接での人物評価、教官選考、学会賞等の各種受賞者選考、科学研究費選考から、果ては学部・研究科の外部評価まで実に多岐に亘る種類の評価に関わって、その難しさを身にしみて感じている。まず、あらゆる評価において最も重要なことは、客観性(公平性)と評価基準が確立していることであろう。評価基準については、当然、評価される側がその基準を周知していることも原則となる。乱暴な分け方になるが、評価対象を人的要素の無いものと人物評価そのものを含むものとに分類した場合、前者は人間的要素の介入が少なく済むという点において比較的やり易いが、後者は極めて困難な所業となる。

大学で教育研究に携わる者として、研究(業績)の評価は、する側、される側としてもその根幹をなすものであろう。研究の評価において、最も重要であり、時にイーミーに語られ過ぎる「独創性・オリジナリティー」について考えてみたい。私共はしばしば論文のイントロダクションに“かくかくの知見がA系で明らかであるが、B系については全く知られていないのでB系で行った”などの記載をすることがある。しかしこれでは独創的な印象は与え難い。オリジナリティーとは、独自の視点を論理的に普遍

化することにあるのではないだろうか。従ってここに、その評価における難しい問題が出てくる。多くの科学的事実はその以前の科学的事実から展開されるものであり、その見極めは至難であろう。このように評価基準という点において研究の評価の難しさはあるものの、ある程度の客観性が保たれていることから比較的、研究そのものの評価は行い易い。最近では客観的評価の目安のひとつとして論文のインパクトファクター、サイテーションインデックスがややもすると一人歩きをしている感も見られるが、着実に浸透している。これらが論文の絶対評価を示すものでないことは当然であるが、どの程度の科学的クライテリアを満足させるものであるかについては客観的指標になり得るだろう。

一方、人物評価そのものを含む評価はきわめて難しい。前述のように研究そのものの評価は比較的客観的に行い得る。しかし、その研究に携わった人物の評価になると話が少し複雑になってくる。更に、面接などで人物評価する場合も典型的な例であろう。人物を評価する時に、評価する側の視点が細部において異なることは、個人の価値観、感性が同じでない限り充分おこり得るものである。この場合に重要なことは、評価される側が評価基準を理解していることにある。又、評価する側は評価基準を出来るだけ客観的なものにし、その評価はその基準においてのみ適用されるもので、全体を知るものではないとの視点を持つことも必要であろう。

あらゆることの境界があいまいになり、価値観もますます多様になっていく中で、適性に評価し、評価されることはますます重要になってくる。評価基準と客観性の確立が必須であると同時に、評価そのものは単に一部分を示すに過ぎないものであるとの認識を持ち、評価し、評価されることに慣れることも重要ではないだろうか。



* Akemichi BABA
1946年4月12日生
昭和44年大阪大学・薬学部・製薬化学科卒業
現在、大阪大学大学院薬学研究科・薬学研究科長・薬学部長、薬学博士、神経薬理学
TEL 06-6879-8180
FAX 06-6879-8184
E-Mail baba@phs.osaka-u.ac.jp